

秋季研究会参加者の感想

雪は天から送られた恵みである

佐藤 妙子

雪国育ちの私にとって、雪は身近な存在だ。けれど、知らなかった。水溜りに張った氷の中に、きれいな六角形の花があることを。雪の結晶が、気温と湿度によって形を変えることを。「雪は天からの送られた手紙である」とはこういうことだったのか。目からウロコが落ちた。

雪への興味がわいた私は、早速、雪について書かれた本を読んでみた。そこに書かれていたのは、「雪は、私たちの生活に多くの恵みをもたらしてくれる」ということだった。夏の暑さと雪による冬の寒さ。この著しい季節の変動が、多くの作物を育ててくれる。雪解け水は、夏の渇水^{むろゆき}を防ぎ、広大な田畑を潤す。また、水力発電のエネルギー源でもある。雪を利用した冷蔵庫「雪室」は、野菜や酒類の貯蔵に役立つ。

読み進めていくうちに、私はふと思った。こういったことは、本当なら日々の生活の中で気づくべきではなかったのか。きっと、「雪はじゃまもの」という強い思いによって、覆い隠されてしまっていたのだろう。今回の講演がきっかけとなり、その覆いがとれたのだ。今は、「天からの手紙（恵み）」を心待ちにしている。

ふたつの友の会

四宮 義正

2015（平成27）年12月12日、高知県立文学館において神田健三さんによる講演会が開催された。演題は「寅彦と宇吉郎」である。はじめの方で寺田寅彦記念館友の会と中谷宇吉郎雪の科学館友の会の交流の様子が写真と共に紹介された。私にとっても、些^{いささ}か懐かしいことであり、この機会に少し振り返ってみようと思う。

寅彦の会があることを知ったのは1995（平成7）年の夏の終り頃である。飛行機の中で新聞を読んでいると「科学朝日」10月号の広告が目にとまった。それは「寺田寅彦～時代を超越するその精神・その科学」という特集の部分であった。寅彦に関しては以前から関心があったので、早速購入して樋口敬二さんや太田文平さんの文章を読ませていただいた。樋口さんが寅彦の「今に生きる魅力」を語っている中で高知市の寺田寅彦記念館友の会について言及されていたので入会お願いの手紙を出したところ、すぐに堀見矩浩さんから9月9日付けのお手紙と会報「榭」1～6号、特集号が届いた。榭の1号が1994（平成6）年5月発行であるから会の発足から1年余り後だと思う。したがって、加賀までの団体旅行に参加できなかったのは残念であった。

一方、雪の科学館については新幹線の中で雑誌を読んでいると白山を背景にした雪の科学館の

写真と紹介の記事が出ていた。問い合わせしてみると、見神千絵さんからお手紙と「雪の科学館通信」1～2号が送られてきた。改めて日付を確認すると1995（平成7）年9月19日付であった。また友の会については準備中とも書かれていた。その後1998（平成10）年7月4日に片山津地区会館テリーナホールで友の会の発会式があったので出かけて行った。この時、大森一彦さんの講演「私の宇吉郎—中谷先生の本をめぐる識者の眼」を拝聴できたのは何よりの喜びであった。日本近代文学大系34「寺田寅彦集」（角川書店）に付録された詳細な参考文献目録に驚嘆していたので、実際にお会いできて感激したものだ。また、いただいた会報の創刊号で「名称」を募集していたので帰りのサンダーバードの中で、あれこれ考えた結果「六花」として応募したところ採用されたのは嬉しいことであった。

このようにふたつの友の会に入って現在まで続いているのであるが、どちらも多彩な会員と出会うことが一番の楽しみだと思っている。宇吉郎の会が高知へ来た時には恒石直和さんが張り切って説明してくれた様子を思い出す。名前を挙げると切りがないので、それは控えるが、地球物理学を研究して寅彦や宇吉郎について解説書を書いている人、文学方面から二人を研究している専門家、雪華グッズをたくさん収集して展示会を開く人、宇吉郎に関する書誌や記事を探索・研究している人、記念館を守っている人、手紙や電子メールで情報や近況を遣り取りする人、ブログ等で情報発信する人、全国に居る両者のファン等それぞれ個性のある素晴らしい皆さん方である。総会などで訪れると、ゆかりの地を案内してくれる地元役員皆様の親切なおもてなしは忘れ難い。物故され、或は退会された人も多くて、もうお話しを聞けないのは本当に残念である。また、歴代の会報編集長はそれぞれ見識と^{こたわ}拘りをお持ちであったし、掲載の投稿論文拝読も大きな楽しみである。

どちらの会も名称に施設名が入っているように地域に根差した会であるところに価値があると思う。科学と文学の両域で活躍した寅彦と宇吉郎、ともに著作や研究書の出版が続いているし、ふたつの友の会の活動が継続・発展して行くことを祈っている。

「いちご」

田村倫子

先日の寺田家の墓参の際、墓前に供えられた寅彦先生の好物の一つに「いちご」があった。寅彦先生の好物の「いちご」はどんな味だったのだろうか。

私が小さい頃の「いちご」は、酸っぱいので砂糖や練乳をかけていた記憶がある。しかしいつしか「いちご」に砂糖などは不要なものになっていった。最近では格安のものであってもそのまま食べて甘みを感じられる。

ところで、「いちご」だけでなく、いろんな野菜や果物の品種改良が進み、濃厚な味や甘みの加わったものが増え、たいていの果物は塩や砂糖の添加をしなくてもそのまま美味しく食べられる

ようになった。さらに30年ほど前からは、いろんな作物の遺伝子組換えについても研究されている。その是非についてはともかく、様々な方法によって50年前には考えられなかったようなものがたくさん作られた。

「いちご」についても次々に新しい品種が作られている。ちなみに、墓前に供えられたのは「紅ほっぺ」。美味しい「いちご」を食べている私たちは先生から羨ましがられるのではないだろうか。

秋季研究会に参加して

宮 英 司

講師の神田健三先生のお話や実験に参加する中で、寺田寅彦記念館友の会としての活動を見直さなければ・・・との思いを抱きました。

それくらい「雪と氷の不思議実験」は魅力的であったと思います。モールドによるペンダントづくり、チンダル像の観察、氷のステンドグラスの鑑賞、雲の動きの実験、ダイヤモンドダストの鑑賞等々、理科の世界に引き込まれる見事な展開でした。

かつては、寺田寅彦記念館友の会の活動として子どもたち向けの講座がいくつか実施されていたとのこと。そこでは、椿の落下の実験や渦巻きの実験などが行われていたと聞きます。当時は参加できなかったのもので、その頃からの会員さんに話を聞くだけですが、何とか復活できないものでしょうか。

ところで、寺田先生の評価は東日本大震災以降「うなぎのぼり」ではないでしょうか。著書の復刻版が相次いで出版されたり、地震列島日本に警鐘を鳴らすコラムや記事に引用される回数も大変多くなりました。もとより「生まれてくるのが50年早過ぎた」と評価される程の業績を伴っていますので、あと30年も健在であったならノーベル賞も受けておられたのではないかと思います。

こうした先生の顕彰活動の一環として、寺田寅彦先生の銅像を建てる会が活動をスタートさせ、資金的な準備が整いつつあるのは誠に喜ばしい限りです。数年後に完成する県市合同図書館の一角に母校・高知追手前高校を見つめながら立つであろう銅像を心待ちにしています。そして、日曜市を訪れる観光客の眼にとまり、「高知から有名な科学者が出ていたんだな」と感じていただけるだけでも十分です。

その時には、銅像のそばに説明板をつくり、周辺の史跡紹介とともに、愛弟子・中谷宇吉郎との交流についても触れることができれば両先生にも喜んでいただけるのではないかと思います。そうした様々な思いを膨らませていただいた神田先生の講演に心から感謝申し上げます。

張り子の虎と宇吉郎

山 田 功

高校生の頃、寺田寅彦のいわゆる科学的随筆を読み、自然のなぞ解きをする面白さを知った。しかし、作者寺田寅彦という人物については、詳しくは知らなかった。

ある時、中谷宇吉郎が書いた「寺田寅彦の追想」(甲文社)を読み、寺田寅彦という人物に、また、弟子の中谷宇吉郎に大きな関心を持つようになった。そして、ますます寅彦に魅力を感じるようになった。

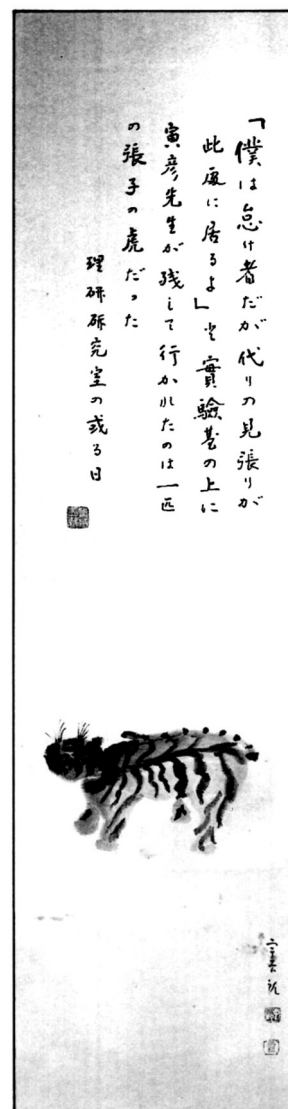
宇吉郎が寅彦の所に初めて伺ったのは、大学のニュートン祭の会計報告であったと書かれている(先生を囲む話)。ニュートン祭の翌日の晩、会計系の宇吉郎は、会計簿と残金とを持って寅彦先生の御宅の応接室へ伺った。その時先生は「どうも毎年、5月か7月頃になるまで会計ができなかったものだが、君のは馬鹿に早いね、僕は本当は、几帳面なのが大好きなんだ。」と大変ご機嫌が良かったという。会計係という何でもない仕事を宇吉郎は素早く済ませ、報告をした。そうした仕事ぶりを寅彦先生は評価した。そこで私は、どんな小さな仕事でも、誠実にすることの大切さを痛感した。すばらしい出会いとは偶然やって来るものではない。そこにはそうなる必然があるはずである。そうして、寅彦と宇吉郎は、信頼に満ちた深い師弟関係をはじめるのであった。

大学の実験室の楽しさを教えてくれたのも、この本であった。(旧制)大学3年生になると実験室に机を貰い、そこにカバンを置いてノート1冊を持って講義に出かける。午後は実験装置を組み立てたり、雑談をしたり、ピーカーで紅茶を飲んだりしたという。大学とはこんなに楽しいところなのかと多いに憧れたものである(実験室の思い出)。そして、実験室で寅彦先生と学生の宇吉郎たちとの話も随筆以上に面白かった。

今回、高知県立文学館で「親愛なる寺田先生～師・寺田寅彦と中谷宇吉郎展～」(2015年12月5日～2016年1月31日)が開かれた。

敬愛する先生の傍にいと筆跡まで似て来るとよく言われる。二人のさまざまな共通点も展示から知る事ができる。科学に対する考え方も似ていると言われている。二人が遺された品々を見、優れた師と優れた弟子の羨ましいほどの関係を改めて感じたのであった。記念講演をされた神田健三さん(前中谷宇吉郎雪の科学館館長、現中谷宇吉郎雪の科学館友の会会長)もこの二人を敬愛しておられる人である。そんな気持ちの伝わるお話であった。

展示会を見、友の会秋の研究会を終え、高知から帰って張り子の虎の事を思い出した。私は部



写真：宇吉郎筆
「張り子の虎」

屋の本棚に張り子の虎を置いている。これは寅彦先生の代りに私を睨んでいる虎である。この張り子の虎を部屋に置きたいと思った要因は、「中谷宇吉郎生誕百年記念 寅彦と宇吉郎の絵画展」の図録で、宇吉郎が張子の虎を描いた軸を見たことであった(この張子の虎の事がどこに書かれていたか忘れてしまい、神田健三さんに教えていただいた)。軸には下の方に張り子の虎が墨で描かれ、上に次のような讚が書かれている。「『僕は怠け者だが、代りの見張りが此処にいるよ』と実験台の上に寅彦先生が残して行かれたのは一匹の張子の虎だっ



写真：わが家の張子の虎

た。理研研究室の或る日」。私は「怠け者」を宇吉郎と取り違えていたが、よく読んでみるとそうではなく寅彦を指している。張り子ならば怠けずいつも見張りができるのである。それは宇吉郎への励ましである。弟子の宇吉郎の傍にはいつも慈愛の眼で見つめている師・寅彦がいたのだ。それは張り子の虎に象徴された心の中の寅彦であったと想像する。

私も張り子の虎が欲しくなり、各地の民芸品を搜した。顔がやさし過ぎたり、背の模様が気に入らなかったり、なかなかこれはという張り子が見つからなかった。やっと気に入り、手に入れたのは三春の張子の虎である。髭がぴんと張り、なかなか凛々しい顔をしている。しっぽの張り具合もよい。しかし、私の怠け癖は尋常ではなく、張子の虎＝寅彦先生のにらみは、あまり効き目がないのがお二人の先生に申し訳ないところである。

注1：「ニュートン祭」 中谷宇吉郎の「寺田寅彦の追想」には、次のように書かれている。「ニュートン祭というのは、東京の大学の物理教室で、毎年12月25日のクリスマスの夜、先生方先輩、学生が集まって、漫画の幻燈や御寿司の立ち食いなどで、一夕打ちとけた懇親の会をするのである。」今でも、各地の大学の物理教室では、ニュートン祭が行われているようである。

事の始まりは、中村清二著「田中館愛橘先生」(中央公論社)によると、次のようであった。東京大学理学部物理の学生であった田中館愛橘と田中正平等が、注意して扱うように云われていた水銀寒暖計を壊したとき、仲間内で罰金を科し、それを貯めていた。明治12年(1879)12月25日、メンデンホール先生に分光器を壊したお詫びに行く代わりに、たまった罰金でクリスマスをやろうということになった。しかし、皆キリスト教の信者ではないので、この日が誕生日のニュートンのお祭りをしようということになり、ニュートンの祭壇を設け、リングで振り子を作り、壊した寒暖計に紙旗をつけ飾った。そして、寄宿舎の仲間が集まり大いに騒いだ。それからは、ニュートン祭では、先生、学生を問わず、1年間の失敗を幻灯機で写し、紹介するようになった。寅彦の書いたものにもよくこのニュートン祭の話が出てくる。さらに調べてみると、石原純作詞、田丸卓郎作曲の「ニュートン祭の歌」があった。「地軸傾く冬の夜を／興ぜずやきみ／木枯らし吹くを他所にして／興ぜずやきみ／今宵暖かき此のまどひ／理学の偉業讃ふべき／開かれぬニュー

トン祭／理学の偉業讃ふべき」(1番のみ記した)

注2：『『張り子の虎』宇吉郎画』 「中谷宇吉郎生誕百年記念 寅彦と宇吉郎の絵画展」図録（平成12年9月、編集：中谷宇吉郎雪の科学館、発行：かがPAP財団）より

秋季研究会に参加して

山本健吉

今回の研究会の最大の喜びは、加賀市の中谷宇吉郎雪の科学館で日常的に中谷宇吉郎の業績に触れることができる実験を高知市で体験できるということでした。

高知では、雪が降ることや氷が張ることなどは1年に数回あるかないかの土地です。その雪や氷について高知で体験できることの機会を神田健三様が与えていただいたことにただただ感謝する次第です。

氷のペンダント作りの楽しさ、チンダル像や氷のスタンドグラスの不思議さと美しさ、さらには、冷凍庫内でのダイヤモンドダストを直に観る事ができたという感動などは、忘れがたいものです。

神田健三様からは、13日の午前中に私ども友の会会員のために予備実験的に午後の内容を詳しく実演をしながらお話をしてくださいました。

お話は、高知と加賀との交流から始まり、氷のペンダント作り、チンダル像、氷のスタンドグラス、大陸から寒気団がやってくる時日本海にできる筋状の雲の再現実験、冷凍庫内でのダイヤモンドダストを見せていただきました。感動の連続でした。

最後に、中谷宇吉郎の雪の研究についてお話をいただき、いろいろな美しく、摩訶不思議な雪の結晶を見せていただきながら、「きらきら」という谷川俊太郎の詩と音楽を聞き、感無量の思いで時を過ごして終えることができました。

寺田寅彦の弟子である中谷宇吉郎の研究に触れる事により、寺田寅彦の成し遂げた業績の偉大さに改めて思いをめぐらしたことでした。

きれいだね
てんからおちてきた
ほしみたい

きれいだね
とってもちいさい
ほんとうは

たべたいな
なめたらあまい
かな？

ふしぎだね
みんなそっくり
ろっかくけい
(後略)

出版社
アリス館

